

「プレスネット」(vol. 878)

平成 29 年 10 月 12 日掲載



「実るほど 頭を垂れる 稲穂かな」は、社会的地位が高い人ほど謙虚であるべしとの戒めを込めた例えである。この例えをイネの側から考えてみるとイネの都合も見えてくる。



安藤 忠男
(土壌肥科学・環境科学)

新米は母の味

稲作農家の苦勞とイネたちの献身に感謝

広島県では田植えから稲刈りまで130日前後。その半ばごろイネは茎の根元に穂の赤ちゃんを宿す。幼い穂は茎を覆う葉の鞘の中で茎や葉から養分を得てぐんぐん育つ。赤ちゃんの誕生から約1カ月後、茎の先端の

せとため込む。しかし、穂が立ったままでは葉に陰を作り、葉の光合成を抑えてしまう。穂に養分が多く送られるようになると穂は重くなり、自然と下に垂れるようになる。稲穂が頭を垂れるのは、少しでも大きな子孫

から眺めると一面の黄緑色で穂はほとんど見えない。良く実った穂は草丈の4分の1ほど下に、確かに重そうに頭を垂れている。私たちから見えるのは茎が最後に

を終えた葉や茎の組織が分解し始め、黄色くなってくる。組織の分解で出来たアミノ酸や糖分は実に送られ、実を太らせる。まるで母親がわが身を削って胎児や乳児に栄養分を届けるようにイネも身を削ってお米を

実らせているのである。

新米は、母親のようにソフトでほんのり甘く、香しい。

稲作農家のご苦勞とイネたちの献身に感謝しつつおいしい新米を味わいたいものである。新米は母の味である。

膨らんだ鞘の中から成長した稲穂が現れる。でもこの時期の稲穂はまるで小中学生のように茎の先端でほっそりと直立している。

を残すためのイネの仕組みの一つである。実りつつある水田をあげ

ではフラッグ・リーフと呼ばれる。出穂後の水田ではこれらの旗たちが光をいっぱい受けてはためいている。

東広島市は広島県最大の米どころ、収穫期を迎えた水田は光を受けて黄金色に輝く。イネの葉の中では役目



広島大学マスタースは、広島大学を退職した教職員で組織しています。市民を対象にした講座も行っていきます。【問い合わせ】kazuwp@hiroshima-u.ac.jp(渡部)